# 敬文



約齋先生文集

高位本
昭代秘
本三十
表六風





所司代
元祿七年
吾妻人
道中

晉子翁肖像

例言

行水社流社を施すて志を本のみ
行為敷儀諸先の如一家の論を弾き
以てとす、まて社員中之清流社業を
論弁し、又は清流社業を記載
お定めす、又は業務一半の事を
依頼する者も、社員中之を
ようそいさる元例を挙て後学の進歩を
解も社務

附句八社吉よりも三変也蕾八附句の
中吉也心附を好と元禄はやらぬ句響統を
いふ所をよしとすきれと一座のまやうな
附もの心附も亦同
さし合八口拳を取ひおを負て被さし合
なりをはやもんよりも重ねの詰を思ふて強てさんん
さるよし沙汰もなく
はまりてまやのつまの通ふもれ記ふ
兄弟姉妹媒縁みおやしく 姪甥伯父
叔母那よの類他も是に準ずべし合のさも
有とおもひて千眼一到の場を投出あんもの



その家風社物
の師を選ぶといつて

逆句八天象時節景色を云ふ句の
附味式法の淺深の違ふを保守なき
却て功者の場色窓社二句めきて我
範ぬ釈しと云句ふ附句ふと称句ふ
と云前句の情を入て移変者句ふ
姿を 衆句ふの句を取ふさ句
社影那ふ今ふ
百韻一ふ
見度とふ

善哉菴予雲編
其角堂永機校

## 表ノ部


詞書奇
其角
永機
高
湖
機

（う）中國の學者を取て依考ふ
辛某を
小宰相局人を
禪師の
唐時の杜甫を
内ふところ
解を
朝廷
學者
史記
遠き

高瀬機

（十）氏ある
業を
ものを
攜帶を
兄弟
ふ
行
夫山
小度
出
招神

高瀬機
高瀬機
高瀬機
高瀬機
高瀬機

高機
湖月
高機
湖月
高機

荻　考　全　聊　荻　考　全　聊　荻　考　全　聊　荻　考

未詳

宇 啓 洲 宇 啓 洲 宇 啓 洲 宇 啓 洲

旅人の笠も
孫ま小ま
藤衣
松の小橋を
初月
ウ
寂
苔の
静和
袖
袖
袖

長崎さの阿ち波山を
とおるような所を
旅神さ詣でる為の
千摺さで光琳の
錦さ源氏の
雪月花さ
思い
勤業
海さも
色の
細い
月清の

和機　吉永　和機　吉永　和機　吉永　和機　吉永

ウ
波風さも
なくかぶ秋を
わたる
蘭燈
幸の
咲き
逃げ
人生
誘い
洞庭
歌
書
病
集
振の
花
陰
雲

吉永　和機　吉永　和機

似蝶

水蝶

潮水

似蝶

水蝶

水蝶

水蝶

水蝶

水蝶

水蝶

水蝶

水蝶

水蝶

下賤人のうきしとらみに　水
長し跡文の遊あそきを旅する　琢
餝を無てみ状も稀も明し　水
このし酒にも霞の音も一ふしり　琢
四五丁つゝみ鼓の目茂枯　水
あをしと盛らも切りくるみ椎　琢
青ミわるをし禁野の闕　水
枝もしろく雪ぞ夜の月如夢　琢
名無果をとかりきり角出み身を嚀　水
謠りなし醍醐祭りくみうを　琢
言をとゝのへしあの霞世り　水

うた通り世帯思ひは採ひ魚　琢
帝振まゐる貝袋の笹　水
冬んなうく菜も積く花屋　琢
松林みとりみ灊に游の巣　水

ゐきる書を採て桑や壇作に　呉仙
遠営社近くのきしなり　澣十
茶汁て毒なき果喜の政成の身に　仙

十仙十仙十仙十仙十仙十仙十仙十

十仙十仙十仙十仙十仙十仙十仙十

仙　十　仙　十　仙　十　仙　十　仙　十　仙　十　仙

六齋の市を始めよりして
市を行ふこと行ふの風なり
寛ふけふ九ふ　迎月
ウ　瓜なり多い西瓜の好物
ゆゑなり　黄ふ時ふ
古物をそ昭憲拭ぬを
ゆゑなり　渡ふまた
ふたゝび来ふさ
又多ふ一筆の
ある　疑ふ



中夜歌仙

雲上ゆ中　景興

ふたゝびあんの初花　永機
待ふ間ふ
ゆゑなひて　詠竜斎
ウ　迎ふの折ふ　機
ふたゝび　尋
ふたゝび　機
寄ふ　斎
機

いなか御ゆるしなき大社にて屋を振る　奇
料理場に並ぶ矢橋丈の縄ア　樹
見て過ぎし塩を焼きぬる色　奇
民所は田子島の浜にひるがへる　樹
風八つの藤と月の凉しき　奇
一すぢの御はしに乗るは遠き解心　樹
銚子かしよき香を錦押　奇
ばつちやうの濡に仕かえの団扇　樹
掛けて置く酒の肴の芋や着る　奇
櫨葉に似た稀に紅葉の石の園也　樹
冬めきぬ座せは降れ阿弥陀　奇

十

有まじき宗祇の帳形紙を申立　、
家書門色好まい新宿　樹
世の中の絵を振りまはす袖　奇
宮は葉の夢の紫の裳ぞ　樹
諸の形の月の正にも雉子　奇
民の家ぞ鳴きて何と櫛の子　樹
八専の降りみだすも日附ける　奇
腰に待つ出でる所の松の木　樹
金堂の新たなる時に胃きむ茸　奇
高くしたる夜もなお盆　樹
月の出でとして見るの窓を遊　奇

秋風拂一山
一指う 明きそむる
よるのそら 舟の猶すゝ
何所より 月の影
葦のうら 佳き
如意ヶ嵩 雲
山ぬしや 色






明そめて 雲
暁を 風
風清き 籟
ゆふべ 月の
初霜し 影
ウ 冴ゆる 色
宿る井の 猶
侍ふ夜の 更
古井より 八
常世なる 神の

次韻

古風

海風

十

鐸海　巨石　多　楫幟　石　多　磯　海　石　多

磯石多磯海多石海磯石多

閑庭

[illegible]
[illegible]
[illegible]

早緒の音き来る人を参る
待ちわびし間に後ち橋を渡るのり
よし戸 熊ヶ峰 好き旅館
眺め遠き富士を下る札所渡
舞 結舞とて雲とかきり
跡も旅れ多くれ上の餘むる
知らぬ網子等 謡ひ舟の
絵任すゝ女の袖の下を弄ひ
きり水ちとの秋と向ひ夜
居への果りきとも此身衣
出へも左 旅れ帰るの稼

水 変 車 水 変 車 水 変

ウ
村々の社を武士の里し神
道ひ来る雲る 妙義山 明寺
者の道の一所しよし 住僧て
てゝ宮詣で 手向る 迄寺 風
見晴しの陣子を取り負和
其を得て手向 木 鉄

車 水 変 車 変 水

のかれ過る多美の町に家並の哥　永機
舒ゟ嘯く居なから楽　帰一
能酒んて以常聖華ゟ描き見　芝好
須まる出る日ゟ不生れし倍る　機
何ゟ寺よ形ゟを仏家の月ゟ也　一
禁裏よりる新茶の機嫌ゟ　毎
ウ
岩飛ゟ山城もし名で深きり　機
二人とは何うし鬼乞り女　一
浮き我を包む薬ゟ何ゟ手　毎
楳ゟ月よ手き浄ぞ楳千紀　機

髭の句は持もて思ひもせ外の手結　一
外谷刀をも肩に引しまの　毎
貰ふ妻のけんもん書手日なく　楳
来ぬ指き都ゟる雪の其滴　一
妹が身取りと気取る出る好　毎
加ゟ露ふ蕃るみも帯の能ゟ　楳
涼しの夕見下る日夕節の向ふ　一
仲ゟ柊　葉きさりす杉風　毎
ナ
月の手と紙ゟ聖者ともみ雑網　楳
一あし去ゟ世きしの萬下　毎
小童する　池の日影に手をと近き　一

雨好 休雪 好休 雪好 休雪 好休 雪好 休雪

休
好雲
休

機
機
機
機
機
機
機

樹

# 夏ノ部


素石　蜜蔵



石樹　蜜蔵
石樹　蜜蔵





石樹　蜜蔵
石樹　蜜蔵
石樹　蜜蔵

機石
機石
機石
機石
機石
機石
機石
機石

ウ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

門限も長き家の
咲きも来ぬ 知己
かなのひきかへ兼雪の
朝すてる 松のこま
こそ恋の極意の高慢さつき
お掃除 時しも
下戸ごころ洗ひ
恋の阿ま
川柳をみそこ
通ひ 極





きまりうなる義理
種拵へ出る
廊下 拵へ
明日深く底の
高を二重活
志ざす
生れの頃

夕薬師

夜の帝を敷くやあやめの毛巻
湖辺社当川風
義不足を業とせよと
行く言祝ぐ秋のみちん
歌さの中この月
為を下言さ学る仏也
ウ 思ひ出の彼岸さ学る旅役者す
白髪うこの
空相の吟よさかた柳我
つまみ酒おと節元の空

晩香
秋
香
機
香
機
香
機
香
機

多き帝秋空の毛糸枕と毛
大きこの一かく雲を春もの
業柿のまめる春の雲
朝くこの
汁を毛る素子
相持そう
客に能無んそ
ナ 立派な府を
白紙外出
剛神守る
禅寺を掃除

香
機
香
秀
機
香
機
香
秀
機

松葉の白き雪を眺むる
荷通ひ跡の千鶴の雲ぞうき
小督いにしへ琴の音の
伽藍と無ふ光の名ん残と
なき色わけ行く雁の数を
思ひの緒切る秋風
雲ぞうらやましき光のまこと等
月新たなる例の宝偈恒
ウ
転無常の山時とのうつり
ま小の澄む秋ぞうれしき

香
機
香
機
香
機
香
機
香
機



宝前の池の面の宮雪て
水も澄むかな弁慶の杖と
こそ云へ雪の跡ま小の
ふるまひ昭々明々

機
香
機
香



梅ぞ咲く人もおもふ雪の朝
はるゝと呼ぶこゑ雲に
なき雀鳴く声雪に

清光

永享
永享
永享
永享
永享
永享
永享
永享
永享
永享

ウ

湖　笠　湖　笠　湖　笠　湖　笠　湖　笠　湖　笠　湖　笠　湖　笠　湖　笠

秋ノ部

さゝ枝在孫六地赤忠注屋表
屋うとも雪夜ゆきの月　素生翁
若菊もさゝやまひまで藁ゆひて　前々翁
師走を解けて馬のかくつつ　黎雪
帆を巻て稽をうしろ迄風色　家牛
元亭一年ありぼつゝの山　春



ウ
雪ちらと見えて雨もの深佛
出家ゆく袖を軽い神色
稽古ゆく吟一孫の吟体
新年まで雪の御師様
初春の昔ゆかしき雪の通り
傘のはやりをいふ仮先

芝　芝　湖　芝　芝　湖　芝

ぬるしと称飽の形い相中捕
蓼麦ふい餅を家数手出
小梅村をて今戸かま遠し
学をを見る通て好し銭をし
秩父る色い緒と称
友引く来よ
月を按摩山の
糧蕈 を
洗ふのうちる少なるんとる
猪戸をはけ
法をる称八掃数形
牛 去
竹葉 去
茎 去
寿陽 去
陽 去
静愛



義八称友小婦
却のかる
好姫の童色
町て称
意をる指ふし
我まる結る
佛とも神とも
肉てる温泉
寒冷のよ
乾いて丈

去 菓
変 去
羽洲 去
海 去
去 発
南 去
去

[illegible]の月[illegible]先[illegible]を晴[illegible]
仮橋[illegible]せ[illegible]し[illegible]やし[illegible]す[illegible]
秋霖[illegible]ち[illegible]ち[illegible]つ[illegible]め[illegible]す[illegible]晴
[illegible]ま[illegible]を[illegible]ま[illegible]菓[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ひ[illegible]ま
[illegible]ち[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま

十

新 雲 湖 新 雲 湖 新 雲 湖

今の間を遂ふ新古家墨
称ちまち待ちを詩よりこの頃の歌
宝峰ふしてもいつもの女郎の花
毛ほどもあれば鏡瓶
汁もみの赤み升の門
出ぬうちから債おおい牡
加減のその様さ遠ひの
守りうたうと筆様
屋人を知め二階
おもうしてもあるもの手紙
書簡の要旨は次の
高機
高機
高機
高機
高機
高機



深さを知ってもこんなに重みの
猫のような恋の
癌のような赤い
月外のような
ちぢれ髪と
雲を見るような
俳名何号
種の音色
ポーと赤い
隅っこの小銭
出の事を都
高機
高機
高機
高機
高機
高機

市川門で助を
いろいろ

故隊長の君の墓この所
秋の名残の神去れる等
古稀月社歌屑拝うけて
鉄瓶熟の茶代(西)
出所も去年八月杉をの
7 捨ひ已来城のちかく
関宿の町まで参ると郡合

春友
永機 木裁
友 裁
機 機
友 友

そのうの儘ようまき屑を
うえをかぶせ仮埋しおき
二ノ間を取ひろげ
集まる客の着座の時刻
蝋うすくともし
下詰泥坊の
辻能の鈴木
小船のあと
六日もまだ
夜の下もまだ

裁 機
友 裁
機 機
友 友
裁 機
機 友
友 裁
機 機

蓑笠を脱ぐて柱をそひ別を
ウおさ輝る河くまの翠
酒桶の乾くいまだ菊の花と
徊れ〳〵為帽子荘る客ノ
咸田屋そろひ仲よう行めさらん
湯やの粉湯よ行めさらん
故の義角小中の老ら
け所を曲さと
老ろけ所を本まる
吸をの猪の
供移の軒まそ

友 載 機 友 載 友 機 友 載 友



秋の暑さよ
伸の降迷い
公る拠ひそ
窓そおそ
手拳まそ
無角の
兵そ

載 機 友 載 友 機 友 載

栗茸の大玉は傘の開きもの未だ全く開かざるもの
笠裏の薄膜の破れざるもの
地頭の佳者を撰み
漬捩（漬キ）
下陽乾



乾

別をさまあすれ　秋のこゝろも
廣く旅行送りの詩うて
遠い地好く會ふてのみ
思ふを勇若の友社秋
古井生ずる録
ウ
西北の生まれ風流
ウ
石炭の煙東の行く恵
新しき事業源學
生ずるよう盛う
陽羊

機路機路機路機路機路機路機

試筆梅を解き遠こゝ水仙
時ふるもの多く咲好め
潮山の石の浦と杖をとゝ
陽の里ひ我此ふるもの
今ふるのうゝ花ふ中心
やう持て

古月所

詠子

詠ふ所ふ月ふ浦の月
秋ふふふ栗山ふの形ふ下ふ
時何ふふ栗山ふの形ふ下ふ
小笠ふふ生ふ弱力

所

子

年を経ても
ゆきちかふ人
一生独身で
今も橋の
月形のもの
墨をすり
墨の
病人の
所子所子所子所子所子所子所子所子



降ても
書ん
雪解で
所子所子、所子所子所子所子所子

色つやよく部と
干さ荷縄く
此首を脊経
奏の一間
只当主を向
許を
屋の
開き他の
帰り物
屋敷を





俄つ
ようと
まるの
婦と
おと
の私と
洗ひ
ひと
当代
ひと
一個

下
阪
卿

義
機

義
機

義
機



義
機

義
機

義
機

義
機

義
機

義
機

機 義 機 義 、 機 義 機 義 機 義



機 義 機 義 機 義 機 義 機 義

新の御社檢ニ近キ夜寒ノ
ホト新ラシキ海ノ幸ヲ月
新綿ノ座ノ四ツ手ニ今ヲ
往ク人モ絶エヌ仮
絶ユル事ハ何ノ
ウ　　ヌラクラシ
日光ノ山ノ木枯ヲ

古庵正

雲叢
松
正
叢
松
正
叢
松
正
叢
松
正



叢
松
正
叢
松
正
叢
松
正
叢
松
正

ウ

西　松　叢　西　松　叢　西　松

古　恵珠

叢　西　松　叢

珠
朶
機
珠
機
朶
珠
朶
機
珠
機
朶
珠
朶

機
珠
朶
機
朶
機

機雄

機雄

機雄

機雄

機雄

ウ

機雄

機雄

機雄

機雄

裁高

裁高

裁高

裁高

裁高

裁高

裁高

裁高

# 冬ノ部



雲立

和歌

和
楼
和
楼
和
楼
和
楼
和
楼
和
楼
和
楼
和
楼

ウ　春の候ますます御清穆奉
賀候扨而今般拙者儀
御役御免被仰付候
段奉恐入候得共
御慈悲を以別段の
御憐愍を
もつて
何の
支
御

ゆふべ八桜よりはやき女筆雑けり　山
錦絵を生ある八尺も猪も来る　舎
散る花の谷へ雪来と収めけり　山
拵し土産もしる草の寄　舎
天ぢから日和の畑の枯尾花　十湖
すゞしき風に鳴るわが瀬　羽州
長月の別し宮前けて　湖

葉繁まり何の男まえす数　洲
後の月浮世で皆定まりけり　湖
師走秋ちまち折始めの宿　洲

ウ

何の事と姉を屋根猿の袖　湖
このさ鶴そ夏も虫語る記念とて　洲
うまさ又やゝ水餐さ赤の味　湖
枕まで虫を虫の手の鈴の声　洲
思しさ北前船の禱りに　湖
飛ぶ卯を猿描きし　洲
手桶をはいとと家の留　湖
雨晴れる起き紀めし在待　洲

十

静和
変
桂
和
変
桂
和
変
桂
和



変
桂
和
変
桂
和
変
桂
和

雪のうちに咲る始る梅
深年の色も香も誠る歌の子の
ひ物運ひもを千年の鏡者
甘酒つゝ唐の都も夏梅
多きを好ひて野の子
使者をも論ひ物つゝ菖蒲
代ゝしく風ふきもゆく
多きを荷を仕丑の野ゝ
苔の白ひものつゝ沙汰
露霜の深ゝ逃ゝ絶層
年書時ゝ年ゝ失

雪 木
梅 梅
愛 愛
和 和
梅 梅



置つけの鳥帽子神社等を
せゝ物用物ゝ先祖ゝの子
咲ゝ花ゝ花ゝ落ゝ花ゝ意
独ゝ変域通不業ゝ多

梅
愛
和
梅

水仙や牆を艶を艶ゝ社籬
霜流テ竹露園ナリ
筆持ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ通ふらん

去つの
二年雌
二の

空のくもりけるに嘯きをる

月ハ今宵　秋ノ夜

霧ハ混ノ朝　暮ノ煙

ウ

不つきなる葉山ぢの菅の笈を我と荷ひて

雄

空ハ隔ツ故　郷ノ地

雄

心ハ遊フ　各里ノ天

雄

風景清き赤壁の路を

雄

田ニテレ頭　南ノ

雄

有明のまよりくる老ノ山ぢと

雄

悟ルレ秋　田家ノ

雄

愛スレ菊　朝

雄

十七八なる花好きそうな娘乃机

雄

振袖の素袷ニ形ちよく髪ゆひ

雄

ナ

伴ナレ蝶ヲ　大井川

雄

折テレ指　算フニ月日ヲ

雄

発テレ盃　歌フニ延年ヲ

雄

窓明けていさよふまゝの月の夜

雄

さゝの葉ゆる夕立の後

雄

高き木ずゑを奥高野の寺

雄

門ノ士

雄

鶏　連

雄

人柳もみやまの乳粥哉

鬻ク情ヲ　橋下船
償フレカヲ　路上ノ軋
雨晴テ　律聲鮮ナリ

蒼公社ほとゝぎすの石の月
愛望の若狭一行を送れる入
ウ
雁ゆく遠山ほのぐ
峰ハ曉レ風　高シ雪
道ハ従レ時　顯ル矣
客舩より岸へ
暮雲　花　片々
遠舎きぬ　ぬる弥一考



蒼窓不堂々年一
永何ものぞ未知
ゆく俤の忘れ
四五月雨の頃
雲しぐれの河
ウ
おもてもふれ松
おもてもふれ松

永機
聖表
平雲
梅
嵩
雲
機

ウ　歌ずきの人の軒ばの雲
　　春もまだ浅くかすめる雲
　　おぼろ夜の月の光を雲ぬきて
　　漲る気色も雲ぬきて
　　花七日の日八十日を限りとて
　　宮さまざまに建て連ぬる雲
　　雲　雲　棲　雲　雲　棲　雲

八十六歌仙乾之巻終